
点と点

しずく

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

点と点

【コード】

N7281Y

【作者名】

しずく

【あらすじ】

きらいな先輩からの電話で、突然の頼まれごと。こりゃまいった、どうしよう。

ものすごくやつかない頼まれごとをされてしまった。

今晚かかってきた電話の相手は、工藤さんだった。

工藤さんは私が最悪にきらっている男子で、青ひげの濃い顔もきらいだし、とっちらかった性格もきらいだ。

工藤さんは私にとって部活の先輩にあたる人だ。

部活といっても、年功序列が最重視される運動部とかではなく、なんとなく気楽な雰囲気放送部だ。

主な活動といえば、お昼に流す音楽を日替わりで担当したり、春の健康診断のとき、クラスごとに保健室へいく順番を放送で伝えるくらい。

その放送部でしか関わりのなかった青ひげの濃い工藤先輩が、なぜ私の家にわざわざ電話をかけてきたのか。

その理由は、工藤さんと30分ほど話してようやく理解できた。

「今のままの放送部では、僕らの懸命な活動がなんの日の目もみずに終わってしまう。僕は3月で卒業だから、このまま二度と放送業務にかかわれなくなってしまふ。それが悔しくてやりきれない」

工藤先輩の言っていることを要約すると、そういうことだった。

「しらんがな」としか言いようがなく、なぜわざわざ後輩の私にそんなこと訴えてくるんですかホントに迷惑なんですけどとんでもな

いKYですねだからきらわれるんですよ、と死ぬほどいいたかったけど、逆恨みされるのも怖いので、小心者の私は「はあ……」と空気の漏れるようなあいづちを打ち続けた。

「そこで、君に頼みがある」

そう工藤さんが言ったとき、背筋にゾクッと悪寒が走った。こいつはろくなこといいださない、という予感がしたのだ。

「君原さん。明日、放送室ジャックをしよう」

ばかいうな。おまえは全共闘か。このゆとり教育の世代に、時代錯誤もはなはだしい！ という思いが頭の中を駆けめぐったけれど、実際に口をついたのは、

「い、いや、先輩……あの、それはちょっと極端すぎるような……」

という、世にも最弱な反論だった。

「なにも一日中ジャックするわけじゃない。昼休みの間だけだよ」

当たり前だ授業あるだろおまえ受験生だろと言えたらどんなに気がすんだらう。工藤さんは続けた。

「流行ソングをぶちきって、もっと有意義な情報を伝えるんだ。学校放送には浪漫があるということ、全校生徒の前で。これは僕らの存在意義を伝えることができる、またとないチャンスなんだよ」

工藤さんの言葉にはいつもよけいなものがくつつきすぎていて、解読するのに時間がかかる。

そんなときは、「要するに、なにがしたいんですか」と聞くのが早い。

工藤さんは、鼻息を荒げて言った。

「放送部員の仕事は、連絡事項を機械的に伝えるだけじゃない。流
行の音楽を流すだけじゃない。僕らにしかできないことがある。そ
れは」

「それは……？」

「今日の出来事を、おもしろおかしく話すことだ！」

なんだ……この人DJになりたいだけか……とわかると、ふいと
肩の力が抜けた。でも、安堵できたのはたった一瞬だけで。

「そんなわけで、僕がメインパーソナリティーをつとめるから、君
原さんはゲストとして登場してほしい」

「は?! うそでしょ？」

驚きすぎて、ついため口になってしまった。なんで私がDJごっこ
に巻き込まれなくちゃいけないのか。

「放送部員は全学年あわせて5人だ。君しか頼める人がいない」

「あと3人もいるじゃないですか」

「只野くんは幽霊部員だし、岬さんと城嶋さんとは口をきいたこと
がない。君原さんにしか頼めない」

私も岬や城嶋のように廊下で工藤さんに会っても無視しときゃよかった。尊敬してない先輩をたてたつてろくなことないと、このとき私は思い知った。

重ねていうが、私は工藤さんが人類の中でも最強にきらいだ。まず青ひげが濃いし、話もくどくて、自分にしか興味がないところもほんとかだ。

「工藤さん……。あの、私、やっぱり放送室ジャックはちょっとよくないと思います」

思いきってそういうと、「なぜ？」と冷静に問われた。

「えっと……。そういうことは、まず先生に相談したり、正式に手続きを踏んですることじゃないかなって。公共の放送を使うわけですし、いくら放送部の活動を充実させたいっていつても、やっぱり放送部の権力を行使してジャックするっていうのは、道徳的にどうかと……。それに、そんなこととして問題になったら、先輩の内申書にもひびきますよ」

我ながら最後の一言は会心の一撃かと思っただけど、工藤さんは「そんなことか」と私の反論を一蹴した。なぐりたい。

「僕はね君原さん。そんなことは百も承知で言っているんだよ。リスクを負うことなしに変革は見込めない。僕は放送室ジャックすることで、全校生徒の度肝を抜いてやりたいんだ」

「先輩……（かんべんして）」

「僕にもできるんだ。やればできるんだ。僕はね君原さん、こんなことに意味なんてないって知ってるよ。お昼の放送でおもしろおかしい話をしたってね、何かが変わるなんて思ってたやしないよ。バカがバカやってバカにされるのがオチだと思うよ。でもね、僕にとっては結果が大事なんじゃないんだ。僕はなにかしたいんだ。なにかをするということが大事なんだ」

工藤さんの口調にはどんどん熱がこもっていくけれど、その言葉の意味を追いかけるだけでせいっぱいだった。だってこの人がだいきらいなのだ。どうやってこの電話を切ればいいのか、そのことだけを脳みそをフルに使って考え続けていたのに。

なのに、いつのまにか。

私ははじめ、工藤さんの電話を迷惑に思った。そのあと、放送室ジヤックという暴挙をどうにかしておさめようと、リスクを伝えて反論した。その次に、工藤さんの主張を黙って聞き、いまは工藤さんがしたがっていることの意味を考え始めている。

この一連の流れを見ると、ほんとうにいやだけど認めるしかないことがある。

いま私は、工藤さんの人生のひとコマに、付き合っている。

「先輩……あのう」

「僕たちならやれるよ。君原さんも入部して半年になるし。機械の使い方も覚えてるよね」

「いや、あの……」

私を巻き込むな、やりたきゃ勝手にやれと言いたいのにな、言えない。

こんなときでも、人をむやみに傷つけちゃいけないという高級な自制心を私はいつどこで学んでしまったんだろう。育ちが良すぎて吐きそうだ。

「おもしろおかしい話のネタは各自3つずつ出して当日に望もう。明日の昼休みの放送担当は君原さんだよ。僕がその時間に放送室に行くからだいじょうぶ」

なにが大丈夫なんだ私の当番まで把握してやがるこいつ確信犯か明日休みたいよ休みたい休みたい高熱よでろ！ そう強く願った。

しかも、私にまでネタだしを強要してくるなんて……ほんこの人だけきらい。

「じゃ、明日の放送室ジャックよろしく頼むよ」

15年間生きてきて、いちばん最悪の頼まれごとだった。

入部して半年、きらいな先輩にひどく面倒なことを頼まれるなんて勢いあまって友達に電話をかけて相談したら、「やだなにそれきもい」「ふつうに行かなきゃいい」「先生にチクれば」と言われた。それで解決するなら、私もそうしたいしそれがいちばんいいと思った。

でも。

工藤さんと放送室ジャックについて話したのは、私。

世界中で私だけ。

あの気持ち悪さとはた迷惑さ、そして工藤さんの真剣さを知っているのは私だけだった。

そんなのちつとも名誉なことではないけれど。

工藤さんの真剣さに胸を打たれたわけでは決していない。それはちゃんと分けて考えることができています。だって私、あの人のこと少しも好きじゃないし、認めてもいない。

でも、たぶん、工藤さんが自分とひとつも共通点のない人だとしても、なにかしらの関わりがあつて、工藤さんと私が点と点としてつながったのだとしたら。

昼休みに好きな曲を流したくて放送部に入ったこととか、工藤さんと廊下ですれちがったときおざなりにでも頭を下げたこととか、いやでたまらなくても相手の話を律儀に聞いてしまう性格とか、たまたま今日は塾が休みで家にいたこととか。

そのすべてをなかったことにできない限り、工藤さんの放送室ジャックからは逃れられなかった。

我ながらなんというしょうもない、深い業なんだ。

明日、工藤さんの提案に乗らずに逃げ切ったとして。

私は工藤さんという「点」を、最後まで避けて通れるのだろうか。

そもそも、最後っていつ？

あの人がきらいという思い出すたびに気分のわるい感情を捨て去ること？

放送部を辞めたら、工藤さんのことをそこまできらいじゃなくなったり、迷惑をかけられずにすむだろうか。

わからない。考えても全然わかんない。どうしよう。

工藤さんは、「君原さんにしか頼めない」と言った。友達がいらないのだ。

友達がいらないなんてかわいそうと思う反面、そりゃいないだろうなとも思う。それに、工藤さんは友達がいなくても大丈夫そうだ。

工藤さんは気持ち悪いけど強い。あの人は自分にしか興味がないから強い。

工藤さんは電話の最中にぼろっと本音をこぼした。

「僕もやればできる。全校生徒の度肝を抜いてやりたい」

工藤さんがいまどういふことで悩んでいて、どうやって自分を保っているかなんてしらん。なぜならきらいだから。それは工藤さんの問題だ。

全校生徒を驚かせることで、工藤さんのなにがどう変わるかなどということは、私には関係ない。工藤さんは自分をなんとかして肯定したいんだろう。工藤さんは自分の味方なんだ。

だからこそ私は、そんな工藤さんに負けたくない。

工藤さんには工藤さんがついてるように、私にも私がついているんだから。

だから、明日の放送当番には行くことにした。

でも、おもしろおかしい話は考えていかない。

工藤さんに、放送室ジャックはさせない。

そのかわり、もう一度提案してみようと思った。

先生に話をして、放送部のみんなで会議もして、これからお昼にちよつとした小話を放送してみるのはどうですか。

生徒にアンケートをとってみたり、みんなの関心の高いことを放送すれば、楽しんで聞いてくれる人もいるかもしれない。

工藤さんがやりたかった放送室ジャックとはちがうけど、私は工藤さんにそれをさせたくないから、ちゃんと言おうと思った。

とはいえ、いまはそう思っても、明日の私が今日みたいな感じで自分の気持ちをもごもごとしか言えなくて、工藤さんが勝手にジャックを始めたら、それはそのときだ。私はしらん。

私は私にできることとできないことの線引きをしつかりとしたのち、お風呂に入って寝た。

その夜。巨大なマイクにつぶされていた工藤さんが、偶然通りかかった私に助けを求めてきたけれど、私は工藤さんがきらいなのでい

つたん見捨てて行こうとしたのに、なぜか途中で靴がぬげてしまっ
て工藤さんのところまで戻らなければならず、なしくずしに工藤さ
んを巨大なマイクから助けだしたけれど、とくに感謝はされなかつ
たという夢を見た。

(了)

(後書き)

そのときの自分にできることを冷静に一生涯懸命考えれば、自分も相手も守ることができると知恵が生まれるのではないかしらと思ってきました。 実用小説です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7281y/>

点と点

2011年11月21日22時47分発行